

朝日新聞(東京版)連載より

松山善三

選

高峰秀子

小さな橋

街で見つけた
ちよつといい話



朝日新聞(東京版)連載より
松山善二・高峰秀子 選

小さなかは

街で見つけたちよつといひ話



雑談社

小さなかけ橋——街で見つけたちよっという話

一九八六年九月一日 第一刷発行

著者——朝日新聞社会部

選者——松山善三 高峰秀子

© Asahi Shinbunsha, 1986. Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号 一〇二 電話東京 三―六五―二二(大代表)

印刷所——株式会社東京印書館 製本所——株式会社堅省堂

定価——一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。

私が出会った「かけ橋」

高峰 秀子

「小さなかけ橋」の中の「アツアツ豆腐」(本文四一ページ)を読んだとき、心の中にポツとあたたかい灯がともると同時に、こないいいお店が、あとを継ぐ人がないために、もう二、三年でなくなってしまうなんて、と、とても淋しく思いました。

私も子供のころには、母にたのまれて、小銭とアルマイトのお鍋を手に、よく豆腐屋さんに行ったものでした。お豆腐屋のおじさんは、大きな水槽の中に沈んでいる真白いお豆腐をソロリとすくい出しては上手に小鍋にうつしてくれました。私はお豆腐がこわれないようにと、来るときとはちがって、ゆっくりゆっくりと歩いて帰ったものでした。

私はいま、東京の麻布に住んでいます。いまの家に引越してきて、もう三十五年になりますが、その当時から私の家の近くにとっても美味しい「鳥肉屋さん」がありました。はじめの頃は瓦屋根に日本風の引戸の小さなお店でしたが、三十五年の間にお店は少しずつ大きくなり、いまでは小

さなビルが建って、その一階で近代的で清潔な鳥肉屋を営業しています。

季節にはうずらや鴨の肉も並びますが、とにかくご主人は鳥肉ひとすじて何十年も前からの老舗だそうです。遠くからわざわざ買いに来るお客さんも多く、夏には軽井沢にも小さなお店を出して、私のヒイキの店でした。

店の奥に、鳥肉をさばく大きな調理台があって、ご主人がいつも黙々として包丁をふるっているのが常ですが、このごろ急にトレードマークの坊主頭がめっきりと白髪になって背中も丸くなり、まったく元気がなくなりました。それもそのはず、あと継ぎに、と当てこんでいた息子さんが大学を卒業すると同時に「一生、鳥肉をさばいて暮すなんてマッピラ」と爆弾宣言をしたので、とうとうお店を閉めることになってしまったのだそうです。その話を聞いて間もなく、鳥肉屋さん、若い人向きの喫茶店風に模様替えされて、坊主頭のおじさんの姿もみえなくなっていました。

鳥肉は、スーパーマーケットでもデパートの食品売場でも売っています。パックされたものだけではなく、ショーケースのある肉売場では、あの鳥肉屋のおじさんよりイキのいい青年たちがキビキビと肉をさばいています。けれど、彼らとお客さんとの間に会話らしい会話はほとんどありません。お豆腐もまたどこにでも売っていますが、お客さんはパックされたお豆腐をレジに運んでお金を払って袋に入れてもらうだけですべてダンマリ。誰も「出来たての豆腐は、そのま

ま生醬油で食べると美味しいよ」なんて声をかけてくれる人などありません。

私は、スーパーマーケットへも行きますが、トマト二個、もやしひとつかみ、と少量の買いものときは、嬉々として八百屋さんの店さきへ飛んでゆきます。

「これ、いま箱から出したばかり、新しいよ」

「枝豆、二本でいいね、お宅二人でしょ」

「トマトはこっちのほうがいい。形は悪いけど味はいいから」

おばさんは、私の眼をのぞきこむようにしてニコリします。

「これ、昨日田舎から持ってきた、一本あげる」なんて、おじさんが、バケツの水につかっていた蘭の花を一本つまみあげてプレゼントしてくれたりするのです。

胸にかかえた紙包みから、おじさんやおばさんのぬくもりが伝わってくるような気がします。

もちろん、口をきかなくても買物はできますが、たった二言、三言の会話でも、ないよりはあったほうが人間関係は優しくスムーズになる。言葉は生活の潤滑油だと、つくづく思います。

私たち、ことに東京などという都会に住む人間は、日夜、コンクリートジャングルの中を駆けまわり、東京砂漠のテントの中で寝起きをしているような、サクバクとした生活をしています。隣の住人の名前も知らず、つっけんどんなウエイトレスの給仕で食事をとり、きげんの悪い運転手がぶっ飛ばすタクシーに乗り、道を歩けば人が突き当たってくる。親切のつもりで口出しすれ

ば、逆に刺されて命をおとしたりするから、なんでもかんでも、誰も彼もが知らんぷり。みざる、きかざる、いわざる人間が多くなって、ますます人間味が失われてゆくばかりです。

そんな殺伐とした世の中だからこそ、新聞紙上にも、「小さなかけ橋」のような記事がのって、多くの人々に読まれるのだとおもいます。

例えば、「針と糸」(本文三四ページ)の中の、きさくて親切な沖山巡査にしても、「夏の思い出」(本文一六五ページ)の中の、優しい少年たちのことにしても、私のような古い人間から見ると、昔なら、その程度の善意はどこにでも転がっている、ごく当り前の行為であって、ことさらに新聞にのるほどのことではなかった、と思うのです。つまり、そういうなんでもないことすら珍らしく思われるほど、いまの社会はどこかヘンテコなのだ、ということになるのでしょう。

私が六十年あまりも生きてきて、つくづく感じることは、時代がいつどう変ろうとも、あたたかい人間社会を維持するためには人間ひとりひとりのためまぬ努力の他にはない、ということです。「思いやりの心」「謙虚な心」このふたつだけでも忘れずにいれば、少くとも人間関係はギクシヤクセずに保たれるのだと思うのです。

「自分を大切にすることは、他人を大切にすることだ」といいますが、「なるほどねえ」と感じ入った経験が、私にもあります。

あるとき、京都の四条河原町でタクシーに乗りました。タクシーというと、たいていの場合は

ドアが閉まるか閉まらないうちに、乗客がガクン！と後部のソファに頭をぶつつけるほどの勢いで走りだすものですが、そのタクシーはじつに、ソロリ！という感じで出発しました。運転手さんは、バックミラーをのぞき見ながらゆっくりとした安全運転なので、私もホッとして肩の力をぬいてソファによりかかりました。ふっと、フロントガラスの下に眼をやりますと、運転手さんのちょうど眼の前のあたりに、掌に乗るような豆盆栽が置かれていました。車の動揺のたびに、豆盆栽の鉢もわずかにコトリ！と音を立てるのです。小さな緑の色が美しく、私は思わず口を開きました。

「かわいいですね、その鉢……運転手さんは盆栽が好きなの？」

「いやア……なにね……」

運転手さんも気軽に口を開きました。

「この豆盆栽はね、安全運転のバロメーターってわけですね。私は、この鉢がすべったり転がったりせん程度のスピードで車を運転しとるちゅうわけですわ」

「へえ……どうしてですか？」

「車は事故が多いよってねえ。うちじゃ女房子供が毎日心配しながら、わたしの帰りを待ってますやろ？女房、子を養つとる以上、わたしにも責任がありますやんか、無茶はでけまへん。そら、こないなノロノロ運転じゃ、水揚げも、ほん、少ない。たまにヤブツ飛ばしてやろか、思

うときもありますけど、そないなときはこの鉢が、父ちゃん、あかんデ、とひっくりかえりよる。そやさかい、安全のバロメーター……」

運転手さんは、少し照れたように笑いました。私の心に、ポツとあたたかい灯がともりました。タクシーを降りてからも、私はなぜか浮き浮きして、足どりまで軽くなりました。というのには、私はつい二、三日前にお隣りの家の奥さんから、こんな話を聞いたばかりだったからです。

お隣りの奥さんは所用で外出をするために、久し振りに和服を着ました。いつもは自分で運転をするのですが、和服では……と考えなおして、表通りまで出てタクシーに乗ったのですが、運転手さんに行先きを告げても例によつてのダンマリさん。おまけにひどく乱暴な運転で、目的地に着いたときは命からがら、といった感じだったそうです。タクシー代を払うとき、サイフの中に小銭があつたので、奥さんは一円玉を五個、つまり五円分は一円玉で運転手さんに渡しました。そのとき、彼ははじめて口を開きました。

「チエッ！ 一円玉なんて金じゃねえや」

運転手さんはそう怒鳴ると、こともあろうに開いていた運転席の窓から五つの一円玉を投げ捨てたのだそうです。奥さんは怒りと口惜しさでタクシーから飛び出しました、のはいいいけれど、まだ足が地面につくつかぬ間にボタン！ とドアが閉まってタクシーが走り出したので、奥さんは片袖をドアにはさまれたまま車にひきずられ、あやうく転倒するところだったそうです。

「小さなかけ橋」は、みんないい話ばかりです。人間なら、誰もが持っている善意、勇気、礼節、優雅、を率直に書きあらわしています。読む人の心がふうわりとあたたまります。

世の中は、意外に温かい。渡る世間に鬼はない、と言いますが、しかし、鬼はいるのです。私たち人間の心の中に……。ひとつふたつは冷たい話、ひどい話があったほうがいい、そう思ったので、私がすすんでイヤな話を書きました。

まえがき

朝日新聞の東京版で、連載企画「小さなかけ橋」が始まったのは、一九八四年十月のことです。私たちは毎日、喜んだり、悲しんだり、時には怒ったり、苦しんだりしながら、生活を営んでいます。こうした日常のひとつひとつの出来事は、そのままひとつひとつの話にほかなりません。私たちの生活は、ですから、さまざまな話の積み重ねの上に成り立っている、とさえいえます。ただし、ここという話は、政治、経済、大事件といった、だいそれたそれを、意味しません。日常生活上での何げない、ちっちゃな、それでいて、何となく人に話したくなるような、そんな話のことです。

人と人とのほのぼのとした交わり、ちょっとびりドラマチックなあの人々の生き方、イヌやネコといった小動物への慈愛にあふれたかわり、移りゆく季節や草木へのしみじみとした思い、思わずニタツと笑ってしまうような光景、エピソード……そんな話がちりばめられているのが、この「小さなかけ橋」なのです。

連載の話は、基本的には投書がきっかけになっています。投書は、社会や世相、市民生活を映し出す鏡です。ただし、投書は、その性格上、おうおうにして、投稿者の一方通行に終わりがち

です。できれば、投書の中のこのところをもう少し知りたいナ、この投書子が本当に言いたいことは何だろうか——投書を読んで、そんな感想を持たれたことはないでしょうか。そこで、この連載では、投稿者と読者の間にまず、記者が立ち、読者の立場から話を聞き、そのあと、いろいろな角度から話を掘り下げる手法をとっています。

せち辛い世の中です。いや、だからこそ、投稿者から読者へ、読者から読者へと、営みは小さいながら、心と心が通い合う、何らかの橋渡しをすることができたならば……そんな思いから、「小さなかけ橋」という名も生まれたのでした。

お読みいただければわかりますように、この連載は、市井の「ふつうの人たち」が主人公です。ここには、この時代を生きる「ふつうの人たち」の、確かな息づきがあり、生活のにおいがあります。

連載は、間もなく二百回を迎えます。話を追って、北海道、山形、福島、栃木、滋賀、京都、大阪……へと、足を運びました。小さな橋をかけることができれば、との思いからにほかなりません。この連載がきっかけで、大人がうたう童謡グループ「小さなかけ橋合唱団」が生まれたのは、望外の喜びでした。

連載のどの一編にも、尽きぬ思いがあり、強いとおしさがあります。本にまとめるにあたり、どの話を採り、どの話を落とすかの作業は、正直、実に心重いものがありました。そこで、選択

に際しては、講談社の希望に添って、松山善三、高峰秀子ご夫妻の手をわずらわせることになりました。

この本は、一九八六年五月までに掲載された「小さなかけ橋」百九十四回の中から、五十九回分を選んでまとめたものです。

新聞の連載では、デスクは大久保元三郎、執筆は一部を除き、松村崇夫が当たりました。文中の年齢は、連載当時のままで、文章の体裁を整えるために、削除、補筆など、一部手直ししました。著者名は、あえてしるしませんでした。投書が話のきっかけである以上、投書子をひっくり返して、「みんなが著者」と考えたからです。出版に当たり尽力していただいた講談社の宇田川真人さん、編集協力の池田幸子さんに深く感謝致します。

一九八六年 風光る新緑のころ

朝日新聞社会部

松村 崇夫

目次

私が出会った「かけ橋」.....高峰秀子.....1

まえがき.....朝日新聞社会部.....8

I

子ガモ 18

ビールかけ 26

針と糸 34

おそうじおばちやま

アツアツ豆腐 41

ヒイラギとマフラー

逝った熊五郎 48

学校の焼きイモ 54

コッコ一家 58

空気入れ 61

37

44

II

「丹沢ホーム」の夜
あの子はたあれ
68 64

大みそかのおじさん
82

はしか
85

マイホーム
92

三人目のおばあちゃん
95

しゃべるスズメ
99

自分への手紙
102

桜の運命
106

少女像
110

定期便
115

荻窪駅
119

III

出産の内祝
128

献血
133

IV

都会っこネコ	137
小島先生を送る会	141
うさぎのゴン太	147
一個のにぎりめし	151
父と娘と豆腐と	156
中国人	161
夏の思い出	165
孫娘の病氣	170
インドの女の子	174
一枚の薬袋	178
モンペとそば	182
ふうせんかずら	188
泥つき野菜	193
病魔と友情	197
タイプライターと歌集	203
話題その後	208
丹後と嫁さん	211

もちつき会	217
傘屋のおじさん	
自転車おじさん	221
ハローランさん	225
	229
泥棒君よ有難う………	
松山善三………	
	233